二〇二〇年度バルトン忌記念講演（1）

女傑・叔母メアリーとバルトン先生

稲場　紀久雄

女傑・叔母メアリー

スコットランドの首都エディンバラにある「ヘリオット・ワット大学」は、世界でも由緒正しい工科系大学の一つです。この大学にはメアリー・バートン記念室があります。

「メアリー・バートン」（以下「メアリー」）は、バルトン先生の叔母に当たる方です。ヘリオット・ワット大学にとっては、よほど大切な人物だったのでしょう。何しろ記念室があるのですから。昨年（二〇一九年）は、メアリーの生誕二百年に当たる年でした。ヘリオット・ワット大学は、生誕二百年祭を挙行しました。

メアリーは、どのような業績を遺したのでしょうか。彼女は、女性の社会的地位向上運動、女性への高等教育機関の門戸開放、女性の参政権運動、禁酒運動、はたまたアメリカの奴隷解放運動といった多岐にわたる活動を展開しました。中でも力を注いだのは、教育問題です。女性の社会的地位向上には、女性が高等教育を受け、技術を身に付ける道を開くことが何よりも大切と考えました。メアリーは、大学教育の、

あるいは技術教育の女性への開放に懸命に取組んだ人です。

ヘリオット・ワット大学は、その前身が「ワット技術高等専門学校」で、一八二一年に創立されました。「ワット」とは、蒸気機関の発明者ジェームズ・ワットです。そういう意味で、技術系専門学校として極めて由緒正しい学校で、後に「ヘリオット・ワット大学」に発展したわけです。

メアリーは、この学校の初代女性理事で、女性に学校の門戸を開いた人です。最初の女性卒業生「エラ」は、バルトン先生のステップシスターで、異母の姉です。ワット技術高等専門学校は、女性に門戸を開いたために、学生数がどんどん増え、経営が安定しました。そういうことで、功績が評価され、一八七四年に終身理事に推されました。（写真―1）

写真－1　メアリー・バートン

メアリーの考え方は、ベンサムの思想「最大多数の最大幸福の原理」、いわゆるベンサミズムです。実は、このベンサミズムの中心人物が、彼女の兄でバルトン先生のお父さん・ジョン・ヒル・バートンです。ジョン・ヒルは、スコットランドの著名なジャーナリストで、議会政治を重視するホイッグ党の論客として注目され、

またスコットランド王室歴史編纂官となった高名な歴史家でもあります。

ベンサミズムと幕末の日本

ジョン・ヒル（写真―2）は、ベンサミズムの権化のような人です。彼の前半生の最大の作品がベンサム著作集全十一巻の編纂です。ジョン・ヒルのおかげで、ベンサムの全著作が今まで残っています。ベンサミズム、「最大多数の最大幸福」とは「何を意味する」のでしょうか。

「最大多数」とは、特権階級を除いた人々という意味です。いわゆる「一般大衆」です。ですから、特権階級を除いた人々の最大の幸福ということなのです。

有名なベンサムの言葉をご紹介します。

Everybody to count for one’
Nobody for more than one.

「誰でも皆、一人として数え、
誰も一人以上に数えてはならない」

これは、ベンサミズムを象徴する言葉です。つまり、ひとり一人の人間の自由、平等を第一義とする。これがベンサミズムの骨格をなす考えです。

写真 - 2　ジョン・ヒル・バートン像
スコットランド肖像博物館、エディンバラ

それでは本当に、メアリーが暮らした十九世紀は、ひとり一人が同じなのでしょうか。

違う（差別されている）わけです。最も違うのは誰か。女性と子どもです。女性には高等教育の門戸も開いていない。こういう時代でしたから、何が何でも女性の高等教育、そして腕に技術を付けなくては生活していけないじゃないかというようなことですよ。

エラ ―バルトン先生のお姉さん― は、母親を早く亡くし、メアリーに育てられました。ワット技術高等専門学校を卒業して、素晴らしい仕事をするわけです。メアリーは、女性にそういう道を開いたのです。

ベンサミズムは、日本人として忘れてはならない考え方です。そこで、ベンサミズムが日本にもたらした恩恵を二つご紹介します。

一つ目は、長州五傑が大学教育を受けられたことです。五人の長州武士、伊藤博文、井上馨、山尾庸三、井上勝、遠藤謹助が密出国してロンドンに渡り、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（ＵＣＬ）に入ります。ＵＣＬは、ベンサムが開いたカレッジです。民族を問わず、男女を問わず、入学できる。だから、長州五傑は、ロンドン大学で学んだわけです。そして、今なお日本の政府留学生がロンドン大学で学んでいるわけです。これは、まさにベンサミズム。つまり、“Everybody to count for one” という考えです。

二つ目は、日本の衛生行政です。長与専斎が、岩倉遣欧使節団の随員としてロンドンに渡ります。長与は、そこで「イギリスでは公衆衛生行政が国家の行政組織の中に大きな地位を占めている」という事実を発見するわけです。

公衆衛生行政の創始者エドウィン・チャドウィックは、ベンサムの最後の秘書を務めた人です。そして、バルトン先生のお父さんジョン・

ヒルの親友です。ですから、公衆衛生行政もまた、ベンサミズムに発しているわけです。先ほど申し上げた長州五傑にしても、公衆衛生行政にしても、その根元はベンサミズムに発しているわけです。

叔母メアリーのバルトン先生に与えた影響

叔母メアリーとバルトン先生の関係をお話ししておきたいと思います。

メアリーは、バルトン先生の人生に重要な影響を与えています。二点紹介しましょう。

第一点：バルトン先生は、衛生工学を大学で学んだのではありません。そういう学び方はしなかったのです。十七歳のとき（一八七三年）、エディンバラ・カレッジエイト・スクールを卒業しました。日本で言うと、早稲田高等学院のような高等学校を卒業したのです。そして、そのまま、大型船舶機械製造会社ブラウン・ブラザーズに入社し、創業者アンドリュー・ベッツ・ブラウンの徒弟になったわけです。徒弟奉公ですね。

バルトン先生は、恵まれた教育環境で育った人です。お父さんは、スコットランドでも有名な政治経済評論家です。母方のおじいさんは、エディンバラ大学教授だったのです。経済的にも豊かでした。そういう恵まれた教育環境、経済環境で育った人ですが、徒弟奉公をしたわけです。

叔母メアリーは、技術教育問題に明るい人です。それなのに、「大学に行きなさい」とは言わなかったわけです。そこですね。現在の感覚で考えてはいけないのです。当時の状況に照ら

してメアリーの対応は極めて的確だったのです。

バルトン先生の友人、知人は、みんな大学に行っているわけです。例えば弟のようなコナン・ドイルはエディンバラ大学医学部に行っています。あるいは、自分のちょっと上のロバート・ルイス・スティーブンソンは、エディンバラ大学の土木工学科を卒業しているわけです。だけど、バルトン先生は徒弟だったわけです。

当時の徒弟は、徒弟修業が五年、お礼奉公が二年、合計七年務めます。バルトン先生は、徒弟奉公を終えてブラウン・ブラザーズの設計主任にまでのぼり詰めます。誰が見ても堂々たる技術者です。だけど、自分の道を変えます。

船舶機械部門は、日の当たる場所です。日本でも軍艦をスコットランドのアバディーンやグラスゴーに発注しているわけです。例えば、長崎のグラバーですね。あの人は、軍艦の建設などの仲介をやった武器商人で、アバディーンの出身です。兄弟もアバディーンで、船舶建造に関わる商社をやっています。日本の軍艦もそこへ発注されているので、ひょっとしたら、バルトン先生も徒弟時代に何らかの形でその設計に携わったかもしれないのです。

アンドリュー・ベッツ・ブラウンは、世界中の海軍関係者から掛け替えのない人物とされた人です。彼が発明した重要な装置は、バランサーです。軍艦は重心が高いですから、不安定です。重心が上にあるから、バランサーが無ければ、転覆してしまう恐れがあるわけです。バルトン先生は、そういう重要な装置を発明した世界屈指の発明家の弟子になった。そして、認められて設計主任にまでなったのに、それを放擲して、衛生工学の道に分け入りました。

なぜ転身したのか。まさに、“Everybody to count for one”です。平等な社会を創り出した

いと考えたのです。当時イギリスでは平均寿命が二六歳ぐらいです。子どもたちも早く死んでいきます。そんなことを許して良いのか。「改革が必要だ」、これがベンサミズムです。

ですから、バルトン先生は、徒弟修業をやり直すのです。師匠がコスモ・イネスＪｒです。この人は、バルトン先生のお母さんの弟です。コスモ・イネスＪｒの指導を受けて、ロンドンに衛生保護協会をつくって、さまざまな経験を積むわけです。

この間、叔母メアリーは、何も言わない。徒弟になったことを批判し、「大学に行くべきだ」などと一言も言わない。強い自制心のある女性だったのでしょう。

第二点：メアリーは、日本の工学教育について詳しく知った上で、バルトン先生を黙って送り出したことでしょう。日本の工学教育の基礎を創った人物は、ヘンリー・ダイヤーです。彼もスコットランドの人です。長州五傑の山尾庸三と特に深い関係のある人でした。

ヘンリー・ダイヤーが、一八七〇年代中頃に日本に来て、十年ぐらい日本の工学教育のために働きます。任期が明けて、一八八三年に母国スコットランドに帰り、就職先としてワット技術高等専門学校の教授職に応募しました。ここで、終身理事のメアリーが応募者の評価に関わっていると思うのです。ですから、メアリーは、日本の実情をよく知っているわけです。日本では、コレラが流行して危ないということもよく知っているわけです。

バルトン先生は、ウィリーと呼ばれていました。「ウィリー、そんな危ないところより、ロンドンでコスモ伯父さんと一緒にしっかり仕事をした方がいいと思うわよ」と、普通の人なら言うはずです。だけど、彼女はそういうことを言わなかった。

バルトン先生の全てを見通して、何も言わないことがバルトン先生の進路を決めたという意味で非常に興味深いですね。余談ですが、バルトン先生の弟妹（きょうだい）は全て外地で亡くなりました。弟は上海、妹はローマ、当のバルトン先生は東京で亡くなったのです。そういうところにも、興味深いベンサミズムの問題があろうかと思います。

台湾に渡ってすぐ、衛生工事の調査をしますが、その調査報告書の中に、「同地の住民につきては、最も憐れむべきものあり」という一行が書かれています。当時の台北の居住環境、生活環境は悲惨でした。この「憐れむべきものあり」の背後にある、ヒューマニズムを考えてほしいのです。それは、日本とか台湾とか、そういう問題ではないわけです。人間そのもの。それがベンサミズムです。「全ての人は皆、一人であるべきであり、そして、一人以上であるべきではない」、この考え方です。

福沢諭吉の「天は人の上に人を創らず」

あと一点、話したいのですが。ジョン・ヒルは、一八四九年『政治・社会経済学とその実践論（政治・社会経済学―その実際的応用）』という小さな本を出しています。この本が、福沢諭吉に影響を与えたわけです。福沢諭吉の「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という言葉があります。これは、まさにベンサミズムです。ジョン・ヒルが福沢諭吉に大きな影響を与え、そして福沢諭吉が『西洋事情（外編）』や『学問のすすめ』という有名な著作を出すわけですが、その作品の底本がジョ

ン・ヒルの『政治・社会経済学とその実践論』です。

考えてみますと、お父さんのジョン・ヒルも福沢諭吉を通じて、あるいはベンサミズムを通じて、いろいろな影響を日本に与えています。バルトン先生は、船舶技術者として最初の段階を歩み出しましたから、グラバーが活躍する、あるいは、長州五傑が活躍する動乱期の日本をよく知っているのです。ロバート・ルイス・スティーブンソンのお父さん、トーマス・スティーブンソンは、日本政府の、あるいは江戸幕府の灯台顧問でした。日本にはブラントンを代わりに寄こして、日本の灯台をつくらせます。ブラントンの師匠は、トーマス・スティーブンソンです。バルトン先生は、そういう意味でも日本の幕末から明治維新のことをよく知っていたと考えても間違いないでしょう。ですから、バルトン先生は日本と運命的に結びつけられていた人です。そして、日本で自分の使命である仕事を果たし、台湾に渡り、そして日本、台湾を思って亡くなった。

叔母メアリーは、バルトン先生と同じように多くの人々の救済のために生涯を捧げた女傑だったのです。バルトン先生の人生と重ね合わせてメアリーの人生に思いをめぐらせていただければ興味深いと思います。（了）

二〇二〇年八月二十日開催
東京都港区白金台五‐二〇‐二
台北駐日経済文化代表処